侵略の諸相とファッシズム

—北島平一郎教授最終講義　二〇〇一年一月一六日—

於　大阪経済法科大学五号館二階

北島平一郎

第一章　ファッシズムの定義
一　ファッシズムの特性
二　ファッシズム社会国家機構
①組合国家
②共産主義
③無政府主義
④社会民主主義
⑤ナチズム
第二章　ファッシズムと侵略
①ナポレオン一世の内陸的侵略
②ナポレオン三世の海洋的侵略
③ナポレオン三世侵略の足跡
（イ）東南アジア帝国
（ロ）太平天国
（ハ）アメリカ内乱

（二）メキシコの冒険
④内陸侵略者アドルフ・ヒットラー
（イ）ファッシズム諸政権とナチス
（ロ）ヒットラー侵略の跡
第三章　海洋侵略国
①ペルーの侵略
②メキシコの侵略
③英国の海洋侵略
④デモクラシー人権主義の膨張
⑤ルイジアナ買収
⑥テキサス併合
⑦米墨戦争
⑧オレゴン国境画定
⑨アメリカ内乱（南北戦争）
⑩米合衆国の世界的海洋発展

本日は私の大阪経済法科大学に於ける最終講義ということで、大層多くの方々に、また学生諸君にご参集いただき、誠にありがたく厚く御礼申し上げます。

ただ今金子道雄法学部長より右につき私に関し、誠に身にあまるご懇篤なお言葉を頂戴し、感謝と感激の極みであります。

また多くの先生方にお集まりいただき、とても先生方のお耳を汚すような講義とはならないと思いますが、よろしくお許しをいただきたくお願い申し上げます。

さて、講義に移らせていただきます。

第一章　ファッシズムの定義

一、ファッシズムの特性

この一年間ファッシズムについて種々研究してきましたが、その特性として就中

① 資本主義社会国家機構の改変

② 議会主義独裁

③ ファッシズムの社会国家機構

④ 侵略主義

の四つを勉強してきました。この中でもっとも重大な要素は①の資本主義の社会国家機構を改変するということであります。

これはどういうことであるかと言うと、資本主義というのは次の諸特性をそなえております。

(イ) 搾取性

(ロ) 利潤追求

(ハ) 投機追求

(ニ) 株式、外国為替

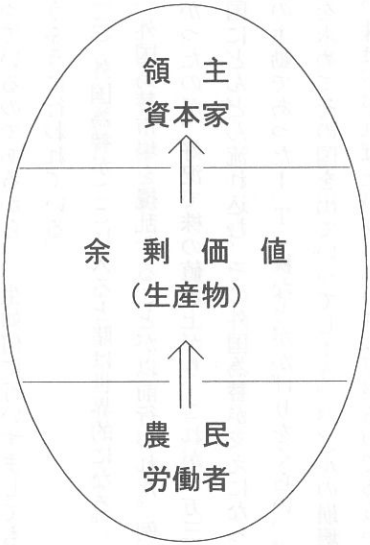
勿論これらは相互にからみあって運動しており、その一つ一つについて個々に説明を加えることも困難でありますが、（イ）について述べると次の如く考えられる。（イ）搾取性、人間は本来的に自己の衣食住に消費する価値の何倍か（生産手段の増強によってこれは無限に拡大し得る）を生産することができる。これを余剰価値（surplus value）と呼ぶ。この余剰価値の帰属先はいずれか、ということが問題となる。封建社会に於いては、これはすべて領主（lord）とその家臣団（vassals）に専属しました。封建社会は農業国家と考えられるが、その社会に於ける生産の担い手、即ち農民には余剰価値の一片も帰属しなかった。

汗水たらして働いて生産した収穫物（穀物類）を全部、領主とその家臣団が横取りしてしまうのである。彼等は米の一粒も生産せずに。

このような強盗搾取機構は何百年、何千年つづいた、と考えられる（原始共産主義社会があって、それが一日、突然、私有財産が生じて搾取国家が生成したとは考えられない。これについては「朝韓中の抗日と大日本帝国の瓦解」、第十一章、日本古代国家論参照）。そこでこのような不備を是正しようということになって一七七六年のアメリカ独立戦争から一七八九年のフランス革命になり、封建社会は崩壊し、自由（liberty）、平等（equality）、独立（independence）、友愛（fraternity）を原則とする人権社会ができ、私有財産が確立されて近代国家資本主義社会が生まれた。

しかし、そこに問題があった。封建社会も近代資本主義社会も搾取の経済機構ということには毫末の変化もなかった。ただ変わったのは領主が資本家になり、農民が労働者となっただけであった。そこに飽くなき搾取の問題があった。

（ロ）資本は利潤追求が属性であり、目的であり、すべてである。それ以外何もない。一切ない。資本はこれをめざして絶えず動いている。片時も不動、静止のときはない。資本は大体銀行に集まっている。列島改造、土地ブーム、



利潤というと資本は銀行からそこに集まる。ダミー（dummy）の土地会社がいくらも作られて世間一般ご存知のようになった。大変な資本のこげつきとなった。最近はマンション建築ブームで土地ブームと同じようなことが起こっていた。私の近所（大阪上一）でもご多聞にもれない。前後左右、東西南北二〇階、三〇階のマンションがボンボン建っている。そんなに同じ場所に需要があるのか。将来どうなるのか。資本はとにかく利潤の生じると考えるところに向かって動くのである。予測も見極めもない。ただ当てずっぽうと賭だけで動いている。凡そ毎日流行している経済予測の当てはまるところはどこにもない。資本主義経済はアダム・スミス（Adam Smith）以来、みえざる手（invisible hand）に導かれて動いている。資本主義は予測できない危険があるから社会主義にして計画経済にしようというのがここから生じてくる。しかし毎日の新聞は、不可能な経済予測を気休めとごまかしのために、毎日載せてあくことがない。これほどのムダと危うさはない。

（八）近代資本主義の華は株式会社であり、株式（share）はその血肉であるが、これをめざして毎日世界的に投機が行われている。値上がりしそうな株に投機資金が集中する。つまり土地ブームで土地に資金が集中すると、土地会社、銀行保有やその関連の株が上がり、それが繰り返されてご存知のような土地投機の株式バブルになった。一時はダウ平均が三万何千円というところまでいった。それが二万八千円になり、株式含み益（取得価格と時価の差益）の

限界といわれた一万六千円を突き破り、アレヨアレヨという間に世紀末には一万四千円台になり、希望の新世紀とうたわれた新年には一万三千円台に下落してしまった。

株式は各会社がお互いに持ち合いでこれを買いあって支えているからすべて会社の資産となっている。株が下落して大損を計上するとその穴埋めは企業の（税金）救済となる。封建社会は領主のための政治であったが、資本主義社会では企業のための政治であるから企業救済のためには労働者をよいように利用する。こうしてリストラ、リストラの大合唱になって今日リストラして自らを救済しない企業は国賊のようにいわれる。一体何のための企業か、誰のための政治かといわれれば、それは企業の経営のためである。他の一切の考慮はそこにはない。

株は賭である。賭の予測ができればそれは賭ではない。この賭の中で世の中は動いている。ギャンブルや競馬でさえしたことはない、というのが一般であろう。石部金吉金兜（イシベキンキチカアカブト）で一生をすごす。しかしその人々が賭という大皿にのっかっているのであるから、一生如何に行いすましてもどうにもならない。その賭は一日六億万株、七億万株の売買というふうに行われている。

（二）外国為替がここに入ると賭は世界的になる。一国の通貨を売ったり、買い占めたりしてその国の経済を支配し、外国為替市場を攪乱することが以前行われた。例えば今日、ある国で株式のダウ平均が一万ドルをなかなか越えなかったのが、好況で株の値が上がり、これが一万三千ドル、四千ドルになったとすると外国為替が利益を求めてその国にどんどん流れ込む。その外国為替が支えになってダウ平均は好調を持続する。バブルである。それが例えば好況の主動であったI.T.株などがかげりをくらい、不況となると、外国為替は、一ぺんにその国をはなれて他に利益を求めてその国を出ていってしまう。バブルの崩壊で、不況である。バブルが崩壊するぞ、するぞといっているのは、株は下がれば上がり、上がれば下がるのであるからいつか必ずそうなる。問題は、何時崩壊するか、その原因は

何かを的確に予測することである。しかしそんなことは株は賭であるから誰も、何人も金輪際できない。ここでゆくりなくも思い出されるのは商業の神さまと泥棒の神さまが同じマーキュリー（Mercury）様であることである。ここに人間のあきらめ、と瞬時も油断できない残虐を好む性質がある。

二、ファッシズムの社会国家機構

このように悪辣、無道、非道の近代資本主義であるからこれを改良しようという主張が起こってくるのは当然である。即ちその生産性、近代資本主義のもたらす豊かさをのみとり出してあとの悪い点をとりのぞこうという試みである。これについては、この一年間、これがファッシズムの中心課題として勉強してきたので詳しくは繰り返さない。

近代資本主義批判は次のようなものがある。

① 組合国家
② 共産主義
③ 無政府主義
④ 社会民主主義
⑤ ナチズム

①組合国家

経済活動を五つなり六つなりの分野にわけ、例えば、製造業、農業、商業、運送業、金融・銀行とし、その各々に

経営者組合と労働者組合をつくらせる。労資協調国家を中核とする。一九一七年のソビエト国家の出現で各国で労働者の資本家攻撃が激化し、サンジカリズム、ロックアウト、工場占拠、ストライキ等がくびすをついで一年一千何百回と起こったことからこれをおさめようとして独裁政権が出現し、その内容が、労資協調路線の右の如くなった。労使紛争は建前上厳禁だが、これを処理する労働裁判所など種々の施策をほどこして労資協調して明るい国家資本主義を達成しようとした。

政治もこの組合を基礎としてファッシズム議会をつくった。例えばイタリアでは組合から八百の議員候補を出し、政府（Grand Council）が二百の候補を出し、その中から政府が四百名の議員を選んだ。オーストリアのドルフス（Engelbert Dollfus）も同様のファッシズム国家を打ち立てようとした。またナチのグレゴリー・ストラッサー（Gregor Strasser）もこのような思想を有していたとされる。

②共産主義

一九一七年にソビエト社会主義共和国連邦（Russian Socialist Federated Soviet Republic）が出現してこれが一九二〇年代、三〇年代に理想の国家として喧伝されたが、今日その実態は次の如くとされる。資本家クラーク（clark）の絶滅と資本主義の廃滅、工場とソフォーズ（sovkhoz）、コルフォーズ（kolkhoz）での労働者、農民の強制労働で、大きな余剰価値を生産し、民生無視でこれを専ら軍備にそそいで世界無比の軍事国家をつくり上げた。そのための犠牲二千万ともいわれる。しかしこれがナチスを破り、白眉の決戦ベルリン攻防戦で西欧軍団をしり目に総統官邸一番槍を果たした。

その機構は、共産党大会とソビエト（会議）大会の二本だてで、その各々に村落、都市、地方、国家というふうに

代議員を出し、その頂点に二年なり三年なりに一回開くそれぞれの大会があった（二、三千名の代議員）。常設機関として各大会の執行委員会が設けられていたが、その上に政治局（ポリトビューローpolitburo）があり、何人からも選挙されないこれが全ソビエト・ロシアを牛耳った。最初のポリトビューローはレーニン、トロッキー（Lenin, Trotsky, Kamenev, Zinoviev, Bukhalin, Rykov, Kalinin）の七人であった。

③無政府主義

この主義をとなえる革命家も有名なクロポトキン（Prince P.Kropotkin）、バクーニン（Mikhail Bakunin）等種々あるが、この主義は最初は、動物の群生にみられる、共調性をとりあげて人類も自然にまかされれば、相互協同して権力政府などは不必要というものであったが、政府不必要を人為的に作出するという革命主義となり、日本では、士官学校中退の若き日の大杉栄がその専売のようになり、後に幸徳秋水事件などが無政府主義革命とされた。

④社会主義、社会民主主義

社会主義は左翼革命主義の総称であるが、建前上は共産主義のめざす資本家絶滅、資本主義転覆を議会主義で行おうというものである。しかし今日の社会主義は社会民主主義となり、資本主義をまもり、労働者の権利尊重、労働三法（労働組合法、労働基準法、労働関係調整法）尊重、社会的立法、社会福祉法（高齢者、母子、児童、身体障害者等の諸保護法を以てこれら社会的弱者を援護育成、更正をはかる）の精力的制定等を以て社会の安定、発展をはかる主義、実行がその政策課題となっている。今日、欧州のほとんどの国はすべて社会民主主義政府となっている。保守的悪辣非道無道の資本主義の根強い日本はこの欧州的現実を以て如何となす。

⑤ナチズム

ナチス・ドイツの社会・国家改造計画はいわゆるヒットラー独裁（Führer Prinzip）色の強いそれであった。工業、商業、農業、金融・銀行、外国為替・貿易等の全産業をたてわり的に幾十もの区分にわけそれぞれに責任者を任命してこれを最終的にヒットラーに直結さす体制であった。例えば、工業では全国を三二のゴウと呼ぶ地域に分け、各地域はクレイスに、それはまたオルトにそれは細胞に、またブロックにというふうに区分し、上に高級執行部が置かれ、各委員長、部長が任命されて各指揮者を統轄し最高統制者に総統代理のヘス（Rudorf Hess）が任命されていた。

農業についても工業同様の措置がとられ、各農業、その補助的職種を規定し、「ドイツ国生産団（栄養団）」なる名称の下にこれらを組織の中に組み入れた。例えば穀類、野菜、衣料、家畜、食肉、農具商、倉庫業、運送業等である。その目的は国民に栄養を与える総ての職種を区分し、網羅して緊密な協同体の中に組み入れる、というものであった。そしてこれらは各地方組織に分けられ、また地域グループに分けられた。そして特に穀類、牛乳、脂肪、馬鈴薯、家畜、家禽等を取り扱う生産団は、特別グループとされ、その区分の目的は、これら生産物の特段の改良、増産にあった。

工業、農業とも労使関係は最重要視され、労使間紛争は原則的に禁止される。「労働憲章」が導入され、経営者と労働者の権利、義務が定められ「労働戦線」という組織化が実行されて、一四の専門別組合をもった手工業労働者総同盟と職員総連合が形成された。農業ではこれは「農民戦線」と名付けられた。農業には世襲農地制が導入された。

これらはナチス・四ヶ年計画の下に促進され、それは総統代理庁、戦時経済庁、行政庁、四ヶ年計画庁がその促進を統轄した（拙著「現代外交史」、創元社（三一〇―三一二頁）拙著「著作集第二巻、ファッシズムの理論と実際」、経法大出版部（三八七―三九八頁）参照）。

第二章　ファッシズムと侵略

ファッシズムはみてきたように悪逆非道無道の近代資本主義を改良、社会・国家を改造しようとしたものであった。しかしファッシズムは自体悪の要素を種々含んでおり、反自由・平等主義、反個性主義、反知性主義、反個人主義（反利己主義ではない）、反国際主義等を属性としており、就中侵略主義であった（いわゆるボナパルチズム(Bonapartism)、ナポレオン一世、三世の所業を含む）。悪を以て悪を制するというには余りに犠牲が大きすぎた。

ファッシズム、ボナパルチズムと呼ばれるものは（日本もそのしりえについて）、すべて侵略をことととしてそれに明け暮れた。スペイン、ポルトガル、オランダ、英国、ナポレオン一世、三世、ヒットラー、ムッソリーニ、スターリン等々である。

ここでこれらの性格とその力量の解明のために、更にその上一般的に国家として明日の命運をも占うものとして侵略の定義を考えてみる。ここにそのため、外交史として三つの要素を導入した。

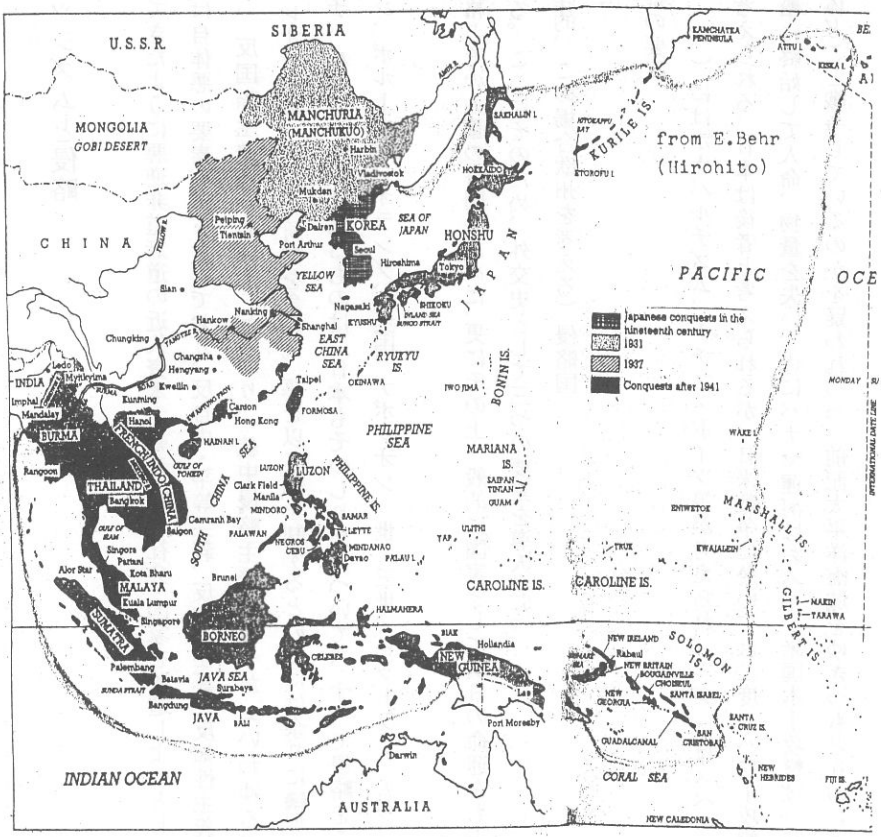
（一）内陸的（大陸的、この場合欧州を考える）侵略国

（二）海洋的侵略国

（三）民主主義人権の要素

以上三つである。（一）にはボナパルチズム、ナチス・ドイツ等が考えられ、（二）にはスペイン、ポルトガル、オランダ、英国等が考えられる。日本は後者と考えられるが、日米戦争に於いては二度のハワイ攻撃を含め、専ら西南太平洋の島々の攻撃に終始して人命、物量を失い、遂にパナマ運河はおろか、米国本土攻撃は一回も行わず、その策戦さえもなく、一体どこと戦争しているのかを疑われつつ、前記太平洋海域をゆきつもどりつして自滅した。奇妙

な戦争であった。


U.S.S.R.
SIBERIA
MONGOLIA
GOBI DESERT
CHINA
MANCHURIA
(MANCHUKUO)
Harbin
Vladivostok
Mukden
Peiping
Tientsin
Dairen
KOREA
Port Arthur
Seoul
SEA OF JAPAN
HONSHU
Hiroshima
Tokyo
YELLOW SEA
Sian
Nanking
Nagasaki
KYUSHU
SHIKOKU
INLAND SEA
BUNGO STRAIT
JAPAN
Hankow
Shanghai
EAST CHINA SEA
Chungking
Changsha
Hengyang
RYUKYU IS.
OKINAWA
Taipei
FORMOSA
BONIN IS.
IWO JIMA
INDIA
Myitkyina
Ledo
Imphal
Mandalay
BURMA
Kwelin
Kunming
Hanoi
FRENCH INDO-CHINA
Canton
Hong Kong
HAINAN I.
GULF OF TONKIN
PHILIPPINE SEA
MARIANA IS.
SAIPAN
TINIAN
GUAM
Rangoon
THAILAND
Bangkok
LUZON
Clark Field
Manila
MINDORO
PHILIPPINE IS.
SAMAR
LEYTE
MINDANAO
Davao
PALAWAN
Camranh Bay
Saigon
SOUTH CHINA SEA
GULF OF SIAM
Singora
Pattani
Kota Bharu
Alor Star
MALAYA
Kuala Lumpur
Singapore
SUMATRA
Palembang
Batavia
JAVA SEA
Surabaya
SUNDA STRAIT
Bandung
JAVA
BALI
BORNEO
Brunei
HALMAHERA
CELEBES
SIAM
Hollandia
NEW GUINEA
Lae
Port Moresby
Darwin
AUSTRALIA
INDIAN OCEAN
CAROLINE IS.
CAROLINE IS.
ULITHI
TAP
PALAU I.
TRUK
ENIWETOK
MARSHALL IS.
KWAJALEIN
MAKIN
TARAWA
GILBERT IS.
SOLOMON IS.
NEW IRELAND
Rabaul
NEW BRITAIN
BOUGAINVILLE
CHOISEUL
SANTA ISABEL
NEW GEORGIA
GUADALCANAL
SAN CRISTOBAL
SANTA CRUZ IS.
NEW HEBRIDES
FIJI IS.
NEW CALEDONIA
CORAL SEA
KURILE IS.
KAMCHATKA PENINSULA
ATTU I.
KISKA I.
SAKHALIN I.
HOKKAIDO
ETOROFU I.
from E.Behr
(Hirohito)
PACIFIC
OCE
Japanese conquests in the nineteenth century
1931
1937
Conquests after 1941
MONDAY
WAKE I.
INTERNATIONAL DATE LINE

ここでは侵略、戦争を論じるのでその是非善悪の判断は論外のこととする。

（一）と（二）を比べてみると断然、（一）の侵略、支配の年限は（二）にくらべ極端に短い。ナポレオン一世の場合は概略二二年、ヒットラーは一三年である。スペイン、ポルトガルの場合は永い。ヘンリー航海王子（Prince Henry the Navigator）、ガマ（V. Gama）、ディエゴ・カム（Diego Cam）、コロンブス（Christpher Columbus）、マゼラン（Ferdinand Magellan）等の一五世紀末（一四九七・一一・一六発出）のいわゆる新世海航路開発につづいた北・中・南米に於ける植民地支配が、一八〇九年頃より、チリ、コロンビア、メキシコ、ペルー、ラ・プラタ（アルゼンチン）等に独立運動が起こり、米国がモンロー宣言（一八二三・一二・二）を発してこれを保護したことから諸国の独立となるが、その間だけでもこれは、三百年以上を経過している。

英国にいたっては、一五八八年（七・八）無冠の新人としてスペイン無敵艦隊（Invincible Armada）を撃破して以来七つの海に日の没することなき大帝国を建設して、二つの世界大戦を経過しながらその大帝国の命脈をイギリス連邦（British Common Wealth of Nations）として、なお今日の世界にも歴々として保持している。これはこの間だけでも実に四世紀を越える。アングロ・サクソンの賢明と決断は他に比するものがない。

①ナポレオン一世の内陸的侵略

ナポレオン一世とヒットラーはあまりにも有名であるが、私のいう内陸（大陸）制覇的侵略をなしとげて、勢威欧州をおおい、それぞれの大帝国をうちたてたが、突然の失敗に会い没落した。大帝国は一朝の夢と消えた。

ナポレオン一世はフランス大革命から起こったいわゆるナポレオン戦争で反革命欧州連合国と戦いながらその成功をおさめ、一八〇九年にはワルソー大公国を含む全欧州をその傘下に収めてそれぞれの国に自己の腹心たる同胞を支

配者としてたてた。ナポレオン帝国の建設であった。ナポレオン一世はいわゆるナポレオン戦術をあみ出し、これが一大効果をあげた。即ちそれまでの戦争は平原に於いて両敵対陣営が横隊で対向し、はじめ射撃し、次いで双方全隊で相突撃し合って勝敗を決したのであるが、ナポレオン一世は、自己の全軍を以て騎兵を先頭に敵陣の中央を突破し、まず敵全隊の右翼を包囲してこれを殲滅し、ついで素早く、右往左往する左半分を包囲攻撃してこれを討ち破った。しかも（イ）敵より多くの兵員、物量を集める。（ロ）敵より優秀な武器（例えばシャスポー銃）の開発。（ハ）敵より早いスピードで移動する、のを原則として実行した。即ち敵より大きくて強い力でこれを圧伏するのであるから負けない。当時フランスは欧州内随一の富強を誇っていたが（例えば人口二千六百万人、英国千二百万人、プロシャ八百万人）、ナポレオン戦術はこの土台の上にあみ出された。日本では石原莞爾将軍がナポレオン戦術の大家としてもてはやされていたが、時代は大鑑巨砲主義をこえて航空戦の時代に突入していた。この航空戦の皮切りは、日本空軍によって行われ、日本空軍雷撃機が、英旗艦プリンス・オブ・ウェールズとレパルスをマレー半島カンタン沖で撃沈したことから起こっている。これを戦略の中核としなければならなかった。英二艦は満身被弾しながら日本航空隊に向かい艦首をたてなおし、たてなおし、して戦った、という。この航空戦を呼号してチェンバレン（Neville Chamberlain）に代わり（一九四〇・五・一一）首相として第二次世界大戦を勝利に導いたのが、ウインストン・チャーチル（Winston Churchill）であった。

かく全欧州をきり従えたナポレオン一世であったが、ここに最後の巨人英国に挑戦する。しかし運命の神はこのたびは無敵ナポレオンに微笑まなかった。彼はドーバー海峡を越えられなかったのである。百年後、アドルフ・ヒットラー（Adolf Hitler）が同じことをやり、やはりドーバー海峡にはばまれて失敗する。僅々小汽船で到達、一時間にも足りぬ海峡、毎々人が泳いでわたるこの海峡が戦時、百万の大軍を以てして、横断不可能であった。ここに吾人は英

国の底力をみる。

ナポレオン一世の失敗は英海将ネルソン（Horatio Nelson）に阻まれたためであった。ナポレオン一世はネルソンにはいわば徹底的に翻弄されている。即ち一七九八年に彼がエジプト遠征を企て、三万五千の兵をもってそこのマメルーク族を討ったが、このときナポレオンの艦隊は、これを追尾してきたネルソン艦隊のためにアブキールで撃破されてしまっている。ナポレオンはそこから単身パリに逃げかえり、そこで翌年ブリューメール一八日のクーデターを以て仏政界を支配するに至るのである。ナポレオンがスペインを従え仏西連合艦隊三十数隻を以て英国に侵攻しようとしたが、そのときスペイン西南トラファルガル沖でネルソン艦隊に捕捉され、艦隊ほとんどを撃滅されてその雄図がくじかれたのであった（一八〇五・一〇・二一）。

ネルソンはこの戦いで戦死する。国の興るのも亡びるのも人による。人は濠、人は石垣、人は城である。ネルソンはそれまでの転戦で既に右腕、右眼を失っていたというが、なお身命を祖国にささげてナポレオンをくじいた。ロンドン・トラファルガル広場の中央柱頭にネルソンはたって祖国の運命を見守っている。

ナポレオン一世はこれで英国武力侵略の夢をたたれ、今度は英国を経済封鎖しようとする。ロシア、アレキサンダー一世（Alexander I）を誘い、これと同盟（チルジット條約）して英国出入りの一切の物品の動きを封じた。…つもりであった。しかしこの一挙で困ったのは、ロシアをはじめ欧州諸国であった。英国は海外に既に植民地を有し、この禁令に大していたみを感じなかった。それよりもフランスとナポレオン自身が逆封鎖のようになって困った。ナポレオンは英国から物資を仕入れ、これを対英国の差押品であると称してフランス市場で売りさばくということをやった。ナポレオンの英国封鎖は失敗であった。

ナポレオンはいまややつあたりとなり、英国封鎖の失敗したのは、ロシアの条約違反の結果である（討たずんばあ

るべからず）、といきまいた。事実アレキサンダー一世は、ロシア経済のため、英国との取引を着実に再開していた。こうしてナポレオン一世のモスコウ遠征となる。

一八一二年六月、ナポレオンは六〇万の大軍をあつめ、モスコウをめざした。兵士は夏軍装で、雪の降る前にロシアはフランスの軍門に下るはずであった。仏軍は九月（七日）モスコウをめざすボロジノで露軍と第一戦を交えた。結果は引き分けと判じられたが、露軍は逸早く戦場を離脱した。ナポレオンは勝ちを誇り、九月一四日彼は白馬にまたがり、モスコウ入城を果たした。彼の得意やまさに思うべし。

しかしモスコウは閑散としていた。誰もいなかった。人っ気がなかった。皇帝も、軍も民衆も男も女もいなかった。仏軍はたちまち窮迫する。食糧さがしがはじまった。モスコウの街が燃えだした。そして雪が降りはじめた。露軍ゲリラがあちこち潜入して火を放ち、モスコウは炎々と燃えた。ナポレオンはロシア皇帝に会戦の通牒を送った。しかし何の返事もまた動きもなかった。一〇月に入ると雪は霏霏紛紛（ヒヒフンプン）と降り、モスコウを包み、全ロシアは白一色となった。

こうしてナポレオンは一〇月一九日、一二頭だて超特急の馬車を仕立て、雪の降りしきる中、パリめざしてモスコウを逃げ出した。飢えと寒気にふるえる六〇万の大軍を放擲して。頭首の失踪を知って仏全軍はあわてふためきパリめざして退却をはじめた。そこへどこからともなく白布で身をかくした露軍が襲いかかった。むごたらしい追跡戦がそこここでくり広げられ、最後ニーメン河を越えた仏軍は一〇万人にまで討ちひしがれていた。

その後ナポレオン一世はパリで再戦をめざすが破れ、捕らえられてエルバ島に流される。彼は一旦はそこを脱出するが、最後は一八一五年六月一八日、ベルギー南部ウォータールーで英将ウエリントン（A.W.Wellington）のために破れ、再び捕らえられてアフリカ西海岸沖のセントヘレナ（英領）に流され六年を流刑の中で過ごした後一八二一年

五月五日崩じた。彼の最後の言葉として「軍の先頭、…ジョセフィーヌ」が記録されている。

②ナポレオン三世の海洋的侵略

ナポレオン一世とならぶ同じボナパルチズムと称されるナポレオン三世の侵略について次にとりあげる。彼の場合は、海洋的侵略と断じられるが、その活躍期間は彼の大統領就位（一八四八年一二月）から普仏戦争で破れ、ビスマルクの軍門に下った一八七一年九月二日までととると二三年間で、海洋侵略家としては短い。しかし彼が手をそめた東南アジア帝国はその意味で発展し、一九五四年のディエンビエンフーの（対ベトナム）敗戦でその幕を閉じるまでとすると一〇〇年になんなんとなってやはり海洋侵略の長期を誇るのである。ナポレオン三世の手を染めたフランス・東南アジア帝国は、当時の交趾支那、安南、カムボジヤ、シャム等を含んでいた。

ナポレオン三世（Charles Louis Napoleon Bonaparte）は一八四八年、まずフランス大統領となるが、これはナポレオン一世モスコウ敗戦からフランスが三〇年間の雌伏を経てようやく国家再活性の気運を迎え、大ナポレオンの記憶が再びフランス全土をおおう時勢に投じたものであった。彼が誰でもなくナポレオンであったことが幸いした。彼とナポレオン一世との縁戚関係は興味深い。即ち彼の父ルイ・ボナパルトは大ナポレオンの弟であり、オランダ王であった。母は彼と結婚したジョセフィーヌの連れ子であったオルタンス（Hortense Beauharnais）であった。故に彼にとって大ナポレオンは父系からすると伯父であり、母系からすると祖父であった。ルイ・ナポレオンは幼時、ジョセフィーヌの側で大ナポレオンをみた、という。

ナポレオン大統領はこの風潮を利用して大きな賭にいどみ、一八五二年一一月国民投票によって圧倒的支持（七八二万四千票対二五万三千票）を得、皇帝となり、ナポレオン三世となった。そして、翌年、彼は宿敵ロシアに戦いを

挑んだ（クリミア戦争、仏英土サルジニア対ロシア、一八五三年―一八五六年）。ナイチンゲールで有名なクリミア戦争である。そしてここで見事ロシアを撃破し、大ナポレオンモスコウ敗戦の仇を報いたのであった。以後ロシアは反対に三〇年間を黒海に閉じこめられることとなる。

③ナポレオン三世侵略の足跡

ナポレオン三世は常に大ナポレオンの影を引いて活動したといえるが、その活躍は非常に精力的であり、内外に休む間もなく勢威を振った。その全体の評価は概ね、海洋侵略的政治家といえる。

彼の進歩性の随一は、イタリア国家統一を達成（一八六一・三）したことであった。オーストリアの勢力をイタリア半島から駆逐してこれを達成したが、その首都ローマの開放には法王擁護から早くも反対を打ち出した。一八五九年七月ナポレオン三世が、イタリア統一を達成し、ミランに入ったときはその往来は娘達の投げる花束でうずまり「我が開放者、救済者」の叫びが青空にこだました。しかしカソリシズムを深く信奉する帝は、ローマ・カソリシズムを守り、その自由化に反対した。

ナポレオン三世はスエズ運河を開削し、低関税政策を推進して世界自由貿易の発展に力をつくしたが、反対に次の如き海外侵略を行った。

（イ）さきに触れた東南アジア帝国の建設。

（ロ）太平天国の乱に乗じた英国の中国侵略に追随して天津を攻め（一八五七年から六〇年）、中国に賠償を課し、英国と共に八港を開かせた。この勢いは日本にも及び、帝は明治維新の負け側の徳川氏に肩入れして一五代将軍慶喜にフランス軍装を贈ったりした。英国は勝ち組の薩長を応援した。英仏世界観の相異はここに歴然としている。

（八）アメリカ内乱（いわゆる南北戦争）に乗じて南部諸地方を後援し、北軍の封鎖を解除させると称し、休戦をかかげてこれに介入した。世界各国はこれにまゆをしかめて問題から撤退したが、帝はその実行に固執し、最後、リンカーン大統領から丁重な拒否をくらった。

（二）メキシコの冒険、ナポレオン三世はカソリシズムの世界的擁護者、伝般者として振る舞ったが、スペインから独立した（一八二一年）メキシコ政治に介入、ここに一大カソリック王国を建設しようと企てた。

一八六〇年、メキシコは敗政難から外国借款の利息不払いを決定したため、怒った英西両国はここに出兵した。ナポレオン三世はこれを機会とみて、メキシコにカソリック王国の建設を宣言、オーストリア皇帝フランシス・ヨセフ（Francis Josef）の実弟マキシミリアン大公（Archiduc Maximillian）を王にたてた。この事態をみて英西両国は驚愕し、急いでメキシコを撤兵してしまった。マキシミリアン大公は皇帝の反対を押し切ってこの挙に出ていたが、仏軍と呼応して一八六三年六月メキシコ・シティを占領した。しかしアメリカは内乱を終息し、直ちにナポレオン三世にモンロー宣言を以て強く抗議、マキシミリアン帝位を否認した。ナポレオン三世は尚メキシコにとどまらんとしたが結局これに抵抗しきれず（一八六七年三月）、メキシコを撤退した。マキシミリアン大公は撤兵に反対、一人メキシコに止まったため、メキシコ全土の反対をを受け、ケレタロで大敗して捕虜となり、銃殺されてしまった。

ナポレオン三世の、メキシコ遠征は、かく惨憺たる失敗に終わり、帝の名声を一挙にくつがえすほどの悪影響を残した。これらがナポレオン三世の事跡で先述の如く帝は東南アジア帝国の建設で海洋侵略者としてその影響をそこに強くのこした。

④内陸侵略者アドルフ・ヒットラー

（イ）ファッシズム諸政権とナチス

ファッシズムは先にふれた如き、社会国家体制を以て、独伊両国に於いて資本主義社会国家体制を改変改良しようとし、スターリン・ソ連邦に於いてはこれを絶滅しようとした。ここには先に述べたことをくり返さないが、この場合、ナチス・ドイツに於いてはヒットラー独裁を打ちたて、ヘス（R. Hess）、ゲーリング（H. Goering）、ゲッブルス（P. J. Gœbbels）、リッベントロップ（von A. Ribbentrop）、ヒムラー（H. Himmler）等をその手先として駆使した。ソ連邦に於いてはスターリンは彼の独裁を打ちたて、ベリア（L. Beria）、ブルガーニン（N. A. Bulganin）、マレンコフ（G. M. Malenkov）、ボローシロフ（Voloshilov）、モロトフ（V. Molotov）等の新左翼ファシスト官僚をトロツキー（L. Trrotsky）ジノビエフ（G. E. Zinoviev）、カーメネフ（L. Kamenev）、ブハーリン（N. L. Bukharin）等の旧執行部にとりかえて同じく駆使した。

日伊両国の場合は、国王権力統治体制とファシズムの抱合がみられる。イタリアの場合はムッソリーニのローマ進軍というクーデターを国王エマニュエル三世（Emmanuel III）が承認することによって両者の統合が出来る。即ちエマニュエル三世は、政権（ファクタ Facta 内閣）の戒厳令布告要請や、その他のムッソリーニとファッシストへの制肘要求をすべてしりぞけてムッソリーニに権力をまかすのである。ここに両者の抱合が成就した。ムッソリーニ政権の場合、国王の統治という権力機構があってのそれであるからその国内支配は素早く且つ有力であった。しかしエマニュエル三世統治機構もムッソリーニ政権から支えられる面も強かったが国王統治機構は長く民衆的土台の上で機能していたからそれがイタリア統治機構の基底であった。しからばムッソリーニ・ファッシスト政権が戦運利あらず重なる敗戦等でゆきづまりをみせたとき国王はクーデターによっていわば王宮内に於いてムッソリーニを逮捕した。

こうしてムッソリーニは忽ち失脚する。イタリア・ファッシスト政権が国王統治機構の上にのっかていた為、ことは容易であった。

イタリア国王権力とファッシストの抱合は、前者の政治的必要と諸般の要請に基づいて成就し破綻させられた。

日本の場合は、軍隊が陸軍を中心に全国支配体制を打ちたてようとする。しかし、源頼朝、足利尊氏、徳川家康的有力領袖を欠き、しかも本来国政の手段にすぎながった武力（軍人勅諭）が政治の主人公とならねばならなかった現実から陸軍にとってはその全国支配の為には昭和天皇統治機構が絶対条件として必要であった。民衆支配の基盤はそこにしかなかった。（昭和天皇の方にはそこまでの要請はない）。

昭和天皇統治機構と軍部の抱合を成就するのは地下草として絶対的尊敬と従順を昭和天皇にささげた東條英機首相によってであった。彼によってこの抱合は成就し、軍は昭和天皇の統治力を利用して、大東亜戦争、太平洋戦争にまでつき進む。

近衛文麿首相が早くにファッシストとしてこれを成就すべき運命にあったが、彼は五摂家九精華の筆頭として昭和天皇を毫末も尊敬せず、その上尾崎秀実（ゾルゲ）を彼の研究会にくみ入れて時局を論じ、国家機密を平気で他にもらすことをやっていて憲兵につきまとわれていたため、天皇統治機構と日本陸軍の抱合はこのときならなかった。

昭和天皇統治機構と軍の抱合の破滅の場合は、イタリアと異なり、昭和天皇による東條首相の更迭、二度の原子爆弾被爆という古今未曾有の大災厄を祖国に課し、刀折れ、矢つき、全国をすべて焦土と化して後、昭和天皇によるポツダム宣言受諾という政治解決によってついえた。ここにも日本の政治無力は明らかであった。

ちなみに昭和天皇の戦争責任については地球的客観的基準はない。国内法（大日本帝国憲法、憲法義解、日本国憲法）と極東国際軍事法廷では、戦争責任なし、と断定されている。これに政治的に国際的に反対する旧ソ連邦とその

関連団体は戦争責任を追究して昭和天皇亡き後も変わらない。ここで注意すべきは、昭和天皇統治機構は二千年の歴史をもち、それとして完成したもので自らは何らの抱合勢力を必要としていなかった。天皇の戦争責任はこの面から論じられるべきである。

ファッシスト国家日独伊三国は同盟を締結する。これは日独防共協定（一九三六・一一・二五）日独伊防共協定（一九三七・一一・六）から発出して日独伊三国同盟（一九四〇・九・二七）となる。これをみてわかる様にその中核は反ソ連・反共産主義であった。これはこのとき日独伊三国を牽引するヒットラーの思惑のあらわれである。彼はドイツを膨張さす為に英国におもねり、その敵ソ連を非難攻撃してその歓心を買うことにつとめていた。英国にしてみれば、仇敵のソ連と、大嫌いな共産主義を白昼きびしく非難するヒットラーに何となく心を許してドイツの経済的復活をたすける面をもっていた。

ここで重大なことは、この三国同盟は反ソ・反共を中心とするが戦力上、同盟国相互に依存関係にあったことである。ヒットラー・ナチスはソ連、米国に対し、日本の武力を必要としたのであり、イタリアは欧州に関し、ドイツに依頼していた。日本は最初米合衆国と戦争する気持ちをもたなかった。ソ連邦に対しては満州偽国、中国を植民地化する為その覆滅を絶対条件としていた。これに力をかしてくれるのはナチス・ドイツであった。三国同盟の性格はここに重点があった。

これに反しスターリン・ソ連は独自の道を独力で驀進してよかれあしかれ他をかえりみなかった。スターリンは歴史上最大最強の武力国家を地球上に打たてることを目ざし、これを見事達成した。その方策は左翼ファッシズムとして

（一）農業、ソホーズ、コルホーズ（国営農場、集団農場）体制の下に農民を一所に集め、トラクター等を用い、強

制労働力によって莫大な余剰価値を生み出し、これを武力建設に投じた。強制労働の犠牲者二千万ともいわれる。

一・工業、国民を工場にしばりつけてディーゼルエンジンによる機械力を用い強制労働させた。

この強制の為の国家統一として粛清という手段がとられた。農業、八百万人の逮捕、うち銃殺三百万人、一九三四年二八〇万共産党員のうち百万人逮捕、処刑。一九三四年中央委員会一三九名中一一〇名の自殺を含む処刑。（この粛正は軍部に及ぶ。北島平一郎著作集第二巻「ファッシズムの理論と実際」、「朝韓中の抗日と大日本帝国の瓦解」第十一章参照）。こうしてソ連は最大最強の軍事国家をつくりあげるのである。

かく日独伊三国同盟対ソ連の関係をみると弱体をさらけ出していたのは前者で、これは他人に依頼して最初から何事にも成功の可能性はなかった。結果は衆知の通りで、日本はソ連邦には一九三九年五月のノモンハン事件で大敗してヒットラーの期待を裏切り、一九四一年六月の独ソ戦では、日本が誇り、ヒットラーも頼みとしていた精強関東軍は本体残部共すでに南方にかり出されていて東三省はがらあきであった。日米戦争は日本がヒットラーに強制されてはじめた。しかし、一九四二年六月のミッドウェー海戦で大敗しナチス・ドイツの役にたたなかった。

相互に武力を利用しようと依頼関係にあった日独伊三国同盟とあらゆるものを抹殺、犠牲にした上、独力で最強の軍事国家をつくりあげたスターリン・ソ連との対比は残念ながらあまりにも明らかである。イソップの雲雀の親子はこれをみて何というか。

（ロ）ヒットラー侵略の跡

アドルフ・ヒットラーが世間をかきまわし、二世界大戦間に欧州の天地に一大センセーションを引き起こしたのであるけれど、彼の政治家としての生命は内陸侵略者としてさきにもみた如く非常に短い。この短さをしかし、誰も予言し得なかった。日独伊三国同盟の日本はその敗亡を背負ったヒットラーに心酔して国をあげて彼に入れあげ自滅し

た。軍人、外交官、官僚、農工商、自由業すべてヒットラー一色に染まった。その点当時の日本はファッショであった。脱個性、脱知性、脱国際性、脱自由とその特性をすべてそなえていた。これをジャーナリズムがあおり戦争を結果した。ジャーナリズムは軍部と結託してその行動に出た（ジャーナリズムは、その行動が日本滅亡の大戦争を引き起こすとは意識しなかった。勿論望まなかった。しかし例えば新聞は販売する為に発行されるから勢い人の眼を引く記事、ギョッとっする記事（狼が来た、来たなど）をのせてこれをスムーズにする。それが戦争扇動となった。この点新聞の販売政策は、この破滅の経験から何とか規制が必要である。これは言論の自由という問題ではない）。平成日本は当時のファッショ性を払拭しているだろうか。そうありたいものだ。

ヒットラーは、内陸的侵略者としてラインランド再占領、オーストリア併合、チェコスロバキア・ズデーテン地方併合、チェコスロバキア解体、実質的併合、ダンチッヒ・ポーランド回廊への要求、メメル奪取、ポーランド分割と進んで英仏両国をはじめとする連合国の反撃を蒙って反転し、ソビエト・ロシアに侵攻、そこで大敗してついえた。まさに絵にかいた様にナポレオン一世が百年以前英国に刃向かい、ロシアに侵入して滅んだのと同じことをやった。これは前にもふれたが、一九一九年から一九四五年の間、即ち第一、第二世界大戦の間の出来事でそこにヒットラーの条件があった。

①ヒットラー労働党政権。彼もまた労働者党でナチスの名称は「国家社会主義ドイツ労働党（National Sozialistische Deutsche Arbeiter Partei）である。本来革命党でマルキシストである。彼もまた当時奔流のようなマルクス主義の影響を受けた事は疑いない。（世界中このことは誰もいわない。）ただ彼の場合は国家が第一義であり、国家社会主義を主張し資本主義温存改良を目指した。従って資本主義絶滅を目的としたマルクス・レーニン主義を否定し、これに敵対した。社会主義、共産主義対決の最極端な事例である。

②ヒットラーは第一次世界大戦に於けるドイツ敗亡の仇を報いたいと念願し、ドイツ経済の復興発展とドイツ領土拡大を望んだが、そのとき欧州各国を侵略することへの大きな妨害となったのは、ドイツ敗戦の結果、これに課せられたベルサイユ条約であった。ヒットラーは欧州内陸侵略を果たす為、最初はベルサイユ条約を逆手にとって、その非違を是正する為に行動する、とした。その中核はベルサイユ条約の一本の支柱であった民族国家主義の一民族一国家主義の真正の実現にありとしたのである。これはドイツを復興さして欧州経済圏を活性化さそう、ドイツの如き大国を除いてはその実現は不可能であるとした英国の政策と一致した。これはただドイツをこわし、これをたたくことのみを心がけたフランスとの大きな相違であった。

このヒットラーの内陸侵略は、同一民族オーストリア併合、チェコスロバキアのズデーテン地方の併合、東プロシアとドイツを再結合する要求、当時リスアニア領となっていたメメルの奪回までは何とかよかったが、そのあとはベルサイユ条約の非違を是正するという大義名分をはずれ、真正の侵略となった。

③ヒットラーの政策的行動は、短期的精勢見とおしの下に衝動的に動くそれであった。この衝動が欧州の天地にセンセーションをまき起こし、世界を恐れさせた。これをヒットラー自身愉快と感じていた。

また常に要求についてすべてはこれだけだとし、この要求が成就すれば、アトには何ものも残らない。これですべては完了すると説いた。

④はじめは英国をはばかり、ベルサイユ条約を問題としながら行動したヒットラーであったが、③にのべる行動によって彼の目指した目標が、次々と達成されるに及んで大胆さに傍若無人が加わって放れ馬のように勝手気ままに行動するようになった。

最初一九三六年三月七日のラインランド再占領の際には、これを当然阻止すべしと思われたフランスはたたず、す

べてが危ぶんだこの賭けにヒットラーは勝ちを収めて、その意気は上がった。チェコスロバキアに進軍したときは、これをたすけるべき条約関係にあったソ・仏両国は動かず、ハンガリー、ポーランドは獅子の分け前にあずかり（ルテニア、テッセン）、英国はひとり、これらに翻弄されてヒットラーに名をなさしめた。

このときは、ヒットラーの眼中に既に英国はなく、彼はズデーテン地方、一九三八年九月一日武力併合を宣言して調停に立った英国老首相、N・チェムバレンをあやつって、ベルヒデス・ガーデン、ゴーデスベルグの二度の会談を結局決裂させてしまう。

このとき欧州は大恐慌となり、ロンドンでは各家庭に防空壕が掘られ、田園に避難する車が相つぎ交通麻痺を起こしてしまった。これが回避されたのはミュンヘン会議（一九三八年九月三〇日）とそのとき結ばれたミュンヘン協定で、ミュンヘン会議開催の報が英国議会に伝えられたとき、そこには一大歓声が上がり、机上の紙片が投げ上げられて神と平和とチェムバレンがたたえられた。

しかしこれ程の大騒動を起こしたミュンヘン協定でズデーテン地方平和併合を果たしたヒットラーは、翌年三月一五日、これをアッサリと破棄、チェコスロバキアを事実上併合してしまった。こうしてヒットラーは前にふれた如く真正の内陸侵略者となり英仏両国をはじめとする西欧同盟と対決する。この頃にはヒットラーは対英慎重論を引っこめ、英国攻略可能と考え出していた。この為には、戦線を統一して西欧に向かう必要があり、百年の仇敵ソ連と提携し同盟してしまう。③に考えたヒットラーの短略的性質の最も端的に表れたものであった。（一九三九年八月二三日独ソ不可侵条約の締結）。かくヒットラーは第二欧州大戦に二正面作戦を避け得た、とし、以後半年にも及ぶ静観期間（Phony War　奇妙な戦争）をおいて、一九四〇年五月、独電撃戦を西欧に展開、怒濤の進軍は忽ちパリを屠った。独軍は数個の機甲軍団（Panzer Corps）を駆使、英仏連合軍をフランス海岸に追いつめ、英軍三〇万人をダンケルク

から追いおとした。「パリはまだ燃えているか」という警句を発してヒットラーは六月一四日、得意満面でパリ入城を果たした。これを契機として日独伊三国同盟が結ばれる。日本は地獄へ一歩大きく近づいた。由来日本は科学的政治学、歴史学を欠き、近未来の予測さえ無理であった。

ヒットラーは一九四〇年ベネルックス三国・ノルウェー、フランス、東欧、バルカン半島等を制圧し侵略の絶頂期にあった。当然彼は英本土侵寇を目指す。仏軍敗北後英国軍は独軍に対し劣勢であった。海空でそれは圧迫されていた。五月一〇日新首相チャーチルが誕生していたが、彼は「血と汗と労苦」を訴えるだけであった。この危機を救ったものは英国の戦闘機スピットファイアー(Spitfire)であった。これがドイツのメッサーシュミット(Messerschmitt)を打ち払った。双方多くの若き俊英が英仏海峡に散った。ヒットラーは九月一五日対英戦休止を指令した。

そしてヒットラーはソ連邦に侵入する。何の理由があったのか。ナポレオン一世はアレキサンダー二世の対英封鎖破りをとがめるとしてロシアを攻めた。ヒットラーには何の名分もなかった。こうなると③の彼の性質分析に狂の字をつけ加えるべきか。対ソ作戦は一九四一年六月二二日に開始された。独軍一五三個師団、空軍二〇〇〇機、侵攻はレニングラード、スターリングラードを中心に展開された。ソ軍は不意を討たれ退却を重ね、捕虜百万人をだしたが、この二都市で踏みとどまった。スターリングラードでは独軍は二二個師団、機械化軍団、戦車軍団等を含み、総数二三〇万を超えた。ソ連はこれに倍加する軍隊をもって迎撃したとされるが、ソ軍の実数は明らかにされていない。なにごとにも秘密を厳守したソ連らしい。この独ソ両軍の激闘は一九四三年一月まで続く。肉弾相うつ古今未曾有の死闘の連続と評されたが、レニングラードは同年一月一一日独軍降伏で終結し、独ソ戦最後の攻防となったスターリングラードは同一月三一日に同じく独軍降伏で幕をとじた。ヒットラーは司令官ボック(F.von.Bock)をパウルス大将(F.Paulus)に代え徹底抗戦を指令、この為独軍一四万人が戦死した。ヒットラーは尚撤退、降伏を許さず、パウ

ルス大将を元帥に昇格し、その勲功をたたえ、おめでとうの祝電を打った。その翌日、独軍は降伏した。

この後ヒットラーは西欧軍とソ連軍の東西はさみ打ちに合い、爆発と砲声の巷となったベルリンで総統官邸の尖頭にシックル・アンド・ハンマー（Sickle & Hammer）の旗がひるがえる中、愛人エバ・ブラウン（Ever Brown）と結婚式をあげて夫妻共々自殺した。ヒットラーは一生不犯（異性を知らず）で押しとおした。何事によらず世間をあざむいた。生涯不犯で彼のカリスマ性が高まる、という打算であった。日本では小野小町と弁慶がそうだといわれた（口せもせず、口もせぬ二人名が高し）。ヒットラーは一旦ベルリンをおとしたエバが、ベルリン中の空気が爆発している中を再び自動車を駆ってかえってきたのをみて死の結婚式をあげたのであった。

ちなみに一九四〇年六月一四日、パリを占領したヒットラーは、翌日フランスの降伏文書をとりつけた。彼はそれをパリ郊外コンピエーヌの森に第一次世界大戦対独戦勝記念として保持されていた客事を引き出させてそこで行った。ヒットラーが自決したのはそれから五年後である。内陸侵略の激烈なそしてはかない運命をそれは象徴する如くである。

第三章　海洋侵略国

①ペルーの侵略

右についてはさきにすこしくのべたように、これらの侵略の歴史は長期間にわたる。ここではくりかえさないが、この近代海洋侵略の歴史はいうまでもなく世界植民地主義のそれである。その発出はコロンブス、マゼラン、ガマ等のいわゆる新世界航路の発見からであるが、そのよってきたる原因は、キリスト教のイスラム教による敗北であった。

即ち、八度に及ぶ十字軍の聖地回復運動の失敗がその原因であった。トルコを先登とするアラブ民族の中近東制覇のため、これをとり除こうとして西欧が敗北したのであった。この為西欧が有していた中近東からアジア、極東にいたるルートが閉ざされてしまった。いわゆる、絹の道、草原の道、海の道の失陥である。これは西欧にとって大きな難儀であり、肉類に欠かせない各種の香料の入手不能が毎日の生活にひびいた。

こうして西欧は大洋に出てこれらの欠を補おうとしたのであった。それが所謂新世界発見の美名にかくれて遂行された（もっともこの美名は侵略歴史家がつけた）。コロンブス、ガマ、マゼラン等の植民主義残虐の記録はまぎれもない。発出はスペイン、ポルトガルであった。この両国はアレキサンドル六世の法王教書（一四九五・三）によってアゾレス群島の西に発見される新大陸の両国帰属と平和裏の分割を命じられた。それと共にキリスト教を再活性化し、これを世界にひろめるべし、という責任を負わされた。スペインは主としてアメリカ大陸に植民し、ポルトガルはインドから東南アジアに植民地を開拓する。

ポルトガルの植民地活動はオランダにとってかわられ、オランダは英国にとってかわられる。アメリカ圏でもオランダが進出し、一六世紀末英国がオランダにとってかわられるが、ここはアメリカ合衆国の台頭によって英国は印度、東南アジアのようには勢力をのばすことはできなかった。スペイン各植民地がアメリカ合衆国の保護の下に英国を排除し、モンロー宣言の下に独立をとげる経緯はさきにふれた。（英国はモンロー宣言に共同しようと試みたが、排除さるべきは英国であると米合衆国に排斥された）。

スペインのコンキスタドールはペルー、メキシコを征服し、チリ、ボリビア、コロンビア、ベネズエラにも支配をのばす。その植民史上の残虐はかくれもない。その主役はピサロ（Francisco Pisaro）とコルテス（Hernando Cortes）であった。

スペイン人がピサロにひきいられてペルーに入ったときみたものはアンデスの犠牲塔であった。不気味なそれらは、ペルーの娘達の墓場であった。ペルーの支配者インカ族は人民の蜂起をおそれ、すぐれた若者の誕生を阻止する為、健康、聡明、美貌の娘達をすべて殺した。彼女等はえらばれて王の伽にはべらされ、翌朝殺害された。

しかしペルーの統一は国民総結集の共産主義体制にあった。王の絶大な権力の前にこの共産主義は粛々と実行せられた。例えば①土地は、神のもの、皇帝のもの、人民のものの三部に分かれ、人民の土地は国民各個に均分された。（唐の均田制、日本大化改新の班田収受法と同類）②結婚が法制化され、結婚と同時に新夫婦に住宅が供せられ、土地を与えられ、子女の生まれるごとにこれを加えた。土地配分は、毎年行われ、家族数によって改訂された。③国民は日神の土地、老病者、出征兵士等の土地を耕し、終わって自己の土地を耕した。最後皇帝の土地が耕された。らま羊の毛は皇帝の所有とされたが、各家族に必要なだけ分配され、まず家族の為についで皇帝の為に娘達がこれをつむいだ。ペルーはこの皇帝共産主義によって強固に支えられ、共同的統一体として力をふるった。ペルーではまた灌漑、治水の術が発達し、おどろくべき石ぐみの用水路が建設された。

ピサロはこうしたペルーに数百人のスペイン兵を率いて侵入し、兵力の正面衝突をさけ、奸計を用いてペルー王をとらえ、処刑を以てキリスト教への改宗をせまった。時に一五二一年一月。その時の皇帝アタウ・ウアルパは助命を嘆願し、ピサロは全ペルーの金（キン）を代償としてこれを約束した。金がいたるところから集められ、それは三五〇万£にも達した。ピサロはこれを収納して、しかも約束を実行せず、アタウ・ウアルパを絞首刑をもって惨殺してしまった。植民史上最悪の残酷と称せられる。ピサロは一五四一年六月二六日、インカ部族間の抗争の果て、暗殺されてしまった。

②メキシコの征服

メキシコへはコルテスが侵攻した。メキシコは数多くの部族が抗争をくりかえし、その中でメキシコ族（アステカ）が最も強力であったが、未だ国家的統一体をなしていなかった。メキシコ族が武力によって他者を圧し、貢納の義務を課していただけ、という。（これをしも国家といわざるや否や）。従って王はいなかった。奴隷制と人身犠牲の風習は根強く、闘争をくりかえし、敗者を捕虜として祭壇にそなえて、僧侶が生きた心臓をえぐり出した。この生きた心臓が最も神を喜ばすといわれた。

コルテスは数百名のスペイン兵を伴ってメキシコ（Mexico city）に侵攻した。このときのメキシコの主君はモンテスマ（Montezuma）といった。メキシコにはケツアルコアトル神の伝説があり、この神には巨大な神殿がささげられていた。この神は「白い人」と考えられ、これが、世のかわり目にメキシコに現れる、というのであった。

モンテスマはスペイン兵の来攻を聞いて「白い人」があらわれたとしてこれと平和に共存するという方策をとった。そしてコルテス一行には宿舎その他の便宜を与え、馬車の大輪程の金、銀牌を与えた。後者はスペイン人をしてメキシコ征服金奪取の決心を強固にさせた。

しかし当然のことながらこの平和策は破れた。モンテスマは各部族から背を向けられ、民衆からもそむかれた。

かくして現メキシコ市のテスクコ湖（Tezcuco）上に浮かぶ首都の攻防戦がはじまり、この壮麗、豪華な都は戦火にさらされた。湖上三本の道が首都を外辺部とつないでいた。コルテスはメキシコ族に反対する部族の応援を受けた。そして三ヶ月間の戦い、首都の籠城戦の後、夢のような豪華な首都は征服された。

モンテスマはこの敗戦の中、幽居の中で淋しく死んだ。

③英国の海洋侵略

ポルトガルはブラジル、インド、東南アジア、フィリッピン、中国等に進出した。ゴア（印度西海岸）、マカオ（中国広東省）に根拠地を築いてこれを前者は一九六一年、後者は一九九九年まで保持し、海洋侵略の息の長い例証となった。

ポルトガルは印度マラバル海岸、コロマンデル海岸等に勢力を扶植して香料貿易等で付近を侵略したが、これらは前記二領地を除いてその支配をオランダ、そして英国に奪われていく。そして英国が入った地域では、それは一切の植民地の成立、発展、支配等の歴史は抹殺されてしまう。英国は七つの海に日の没するなき大植民帝国を建設するのであるが植民史というものがない。あの大量の歴史書（A series of the Cambridge histories and others）の発刊にかかわらず、である。英国植民の悪業、残虐の歴史は完全に抹殺されている。英国のどの歴史にもそれがない。事典といったたぐいの書物にも英国植民史の記述はない。例えばインドの歴史等も植民地時代の記述は英国の書物に関する限り絶無である。香港の歴史、阿片戦争の歴史等も同断である（英国植民地史は、そこの資源、産業、医療、機械、鉄道といったものの記述のみである）。英国人が国益のどこに存するかを判断することは素早く且つ即断である。そしてあやまたない。世界に於いてアングロ・サクソン民族の優秀なことは種々の例証があるが、これもその大きな一つの要素であろう。どこかの歴史好きの国民は例えば日露戦争について、その戦勝が如何に他者の外交支援によったか、如何に薄氷をふむごとき危険なそれであったか、その戦いがもう一カ月も長引けば勝敗の結果はわからなくなっていたことを微に入り、細をうかがってのべ、日本の弱点を世界に知らしめた。

このような次第でポルトガル、オランダ英国植民史の正確な研究は筆者の寡聞、非力のためかなお他日を期さなければならない。

最後に英国が無名非力の一小国から大英帝国に成長する契機について一言しておく。それは英国艦隊が無敵の大海軍スペインのアルマダ（armada）を打破ったことからであった。時は一五八八年六月で、このときアルマダは英国本土攻略を期し、百三三隻の空前の大艦隊を英仏海峡に派遣した。オランダは三万名の海兵隊を準備し、アルマダが勝利を収めれば、それにのって英国本土に侵寇するはずであった。迎え討つ英国艦隊八八隻、勝敗の数は明らかと思われた。この時日で颱風がふき、その余波が海峡にあふれていた。アルマダは全艦相寄って風をさけた。日本元寇の際の颱風情況と同じであった。英国艦隊はそこをついた。八隻の火船を仕立ててアルマダに突入した。火は強風でアルマダに燃えうつり、瞬時に火勢は全艦隊をのみこんだ。当時の戦艦は木造のガレオン船で、火に弱かった。あわてふためくアルマダに英国全艦隊が突撃した。

かくてアルマダは四散し、敗兵は待ちかまえていたドレイク（Sir Drake）の指揮下に討ち取られていった。オランダ兵は解散した。

これ英国の桶狭間であり世界布武のはじまりであった。

④デモクラシー人権主義の膨張

さてこの最終講義もいよいよ最後の項目にうつってきたが、それは民主主義的人権主義を国家の発展、永続の要件として考えることである。

そもそも国家をたてる目的は究極に於いて民主主義的人権のあまねき適用にある。国家はその歩みの遅速はあるが、すべてこの方向に進み発展する。これをまず本講義に当てはめてみると、そのことがよく理解される。

ファッシズム、ナチズムの国家はみた如く民主主義的人権の確立、普及には無縁であり、これの反対概念であるが、

その特徴はさきにふれたとおりで、その命運の短かったことは当然といえた。ナポレオン一世もその点かわりないといえるが、ただ彼は、若き砲兵大将としてイタリア領に入ったとき（一七九六年以来）そこにリグリア共和国、シサルピン共和国をたてている。興味あるところである。ナポレオン戦争はフランス革命の生んだものとしてその意味で彼はやはり革命の子であったのであろうか。

海洋侵略国はその継続がこの人権主義の有無によって決まる。南米の独立は先述の如く、人民の蜂起によって成った。一八二三年のことであった。インド、東南アジア、フィリッピン、中国等はポルトガルからオランダへ、そして英国へとかわる。英国はとくにマグナ・カーター（Magna Carta）以来、強大な議会主義の国として世界をリードする。この英国の相対的人権主義が先行するのであった。

しかし民主主義的人権主義を文字どおり体現し、大洋的発展をとげる国があらわれた。アメリカ合衆国である。本稿にいう条件を絵に描いたようにみたす大国の出現であった。アメリカ合衆国は自由な自分達の政府を建設するというために出現したが、それはアメリカ人のオランダ、英国、フランス等との戦いの中から生まれたものであり、自由と自分達の政府を自分達でつくるという民主主義的人権思想と実行はこれらを経験し、いわば筋金入りであった。

大西洋から起こった米合衆国が両洋にまたがる強大国としてあらわれる道は、その国家の西への発展、太平洋への到達であった。これをアメリカは一八四八年までに達成する。そして太平洋へ直ちにのり入れ、ハワイ（一八五九）、ミッドウェー（一八六七）、ウェーク（Wake　一八九九）、ガム（Guam　一八九八）、フィリッピン（Philippines　一八九八）と進む。しかしその道は早くに日本に向けられ、一八五三年にはアメリカ水師提督コモドア・ペリー（Matthew Galbraith Perry）が浦賀に来航。大統領フィルモア（Millard Fillmore）の親書を幕府に提出して日本の開港をせまった。ご存知の如くそこから日本の近代化がはじまる。

そこにいたるアメリカの道は多くの困難をはらみながらその強力な国力で、それらを次々解決して西へ西へと向かうのであった。

大きな問題はルイジアナ買収（一八〇三）、テキサス併合（一八四五）、カリフォルニア征服（一八四八）、オレゴン国境画定そしていわゆる南北戦争（一八六一―六四）等であった。

⑤ルイジアナ買収（Louisiana Purchase）

これはフランスから買い入れられる。フランスは最初、英米人と激しくアメリカ本土をめざして争い、戦争を重ねるが利あらず矛先を転じてそこから西に向かい未だ荒野であった広大なルイジアナ（ミシシッピー河からテキサス、オレゴンに至る地域、現アーカンサス州、ネブラスカ州、モンタナ州等が含まれる。）に進出これを獲得した。しかし一八〇三年フランス・ナポレオン一世はこれをあっさりと米政府に売り渡した。時に帝はナポレオン戦争の真っ直中で、国内でクーデターを以て政権を確立しせまりくる英露を始めとする欧州諸国と激しく対立、戦争を重ねていたので、アメリカの領土はナポレオン一世の足枷となるとみてこの挙に出たものであった。しかし吾人はここにナポレオン一世が全くの内陸侵略者であった特徴がよくあらわれていることをみる。わざわざ手中のものを売りとばすなどは彼の命運がつきる証拠である。その価千五百万弗（現在邦価約一億九千万円）であった。

⑥テキサス併合

アメリカの西漸はついでルイジアナの西南に広がるテキサス併合へと向かう。ここはメキシコを通じてスペインから支配されていたが、一八二一年メキシコの独立と共にその支配地となった。該地は移民が許されたため、米英、メ

キシコから多くの人が移ってきた。東部が特に多かった。メキシコは移民政策が行き過ぎと感じこれを制限する方途を次々打ち出し、紛争が起こった。これを契機としてテキサス独立の声が起こり、またテキサスの米合衆国への併合を望む声があがった。即ち当然米合衆国はテキサスへ進んでくると予想されたからである。しかし米国には米国の事情があった。それは南北問題、北部の自由州（非奴隷州）と南部の奴隷州の対立であった。テキサスを米国に併合することは南部奴隷州をふやすことになる、というのであった。テキサスは現在のテキサス州である。その併合は、ポーク大統領（James K.Polk 一八四五・三―四九・三）の出現と共に急速に促進され、一八四五年三月一日、米合衆国上下両院はテキサス併合決議を行い、テキサス議会も同併合を決議してしまった。

テキサス併合については時の米合衆国英雄デービー・クロケット（David Crocket）の物語がある。彼は米下院議員を二期つとめた後テキサスに来ていた。素手で野牛をうち倒したという伝説の持ち主として青少年に絶大の人気があった。一八三六年四月、このときテキサスの独立宣言が出たため、これに怒ったメキシコ政府は軍隊を派遣、テキサスのサンアントニオのアラモ要塞で両軍の戦闘が行われた。デービー・クロケットも要塞に入り、数倍の敵を引き受けての激戦となった。勝敗決せず白兵戦となり、ダッガーを手に、肉弾相うつ米国史上有名で演劇、映画に何度もとりあげられた激闘の末、遂にテキサス側は破れた。デービー・クロケットはここで戦死した。このとき彼を惜しみ、悼む声は朝野にみちた。この事実に吾人は米国膨張主義とナショナリズムを強く感じる。

⑦米墨戦争

メキシコ政府はテキサスに第三国との併合を行わないことを条件にその自治を許容するとしていたが、さきの決議によって当然態度を硬化し、臨戦気分となった。ポークは話し合いでテキサス問題を和解に導く心算であったが、米

国の派遣した特使をメキシコ政府は受入れ拒否した。ポークはこのときニューメキシコとカリフォルニアを買収する計画を有していた。ポークは米軍の一隊をリオグランデに進駐させた。一八四六年五月九日メキシコ政府はこれを攻撃、米墨戦争の火蓋が切られた。一八四七年九月に米軍はメキシコ・シティにせまったため、メキシコ大統領パレデス（Paredes）は逃亡した。サンタアンナ(Sante Anna　元大統領）が出て交渉に当たったが、ポークはリオ・グランデから大西洋岸エルパソ（Elpaso）に至る線を国境線とし、その北部の全地域を米領として要求、交渉は再び破れ、米軍はメキシコ・シティを占領、メキシコは敗北を認める。米合衆国はその結果、カリフォルニア、ネバダ、ユタ、ニューメキシコ、アリゾナの全部とワイオミング、コロラドの一部を領土とした。

⑧オレゴン国境画定

これと同時期オレゴン国境の解決がはかられた。オレゴン（現ワシントン州、オレゴン州、アイダホ州）の米加国境の解決が懸案となっていた。英国側は北緯四二度までをカナダ領として要求、米側は同五四度四〇分までを米国領として要求していた。一八四三年、米国ではオレゴン・フィーバーは最高潮に達し、「五四度四〇分か戦争か」という叫びとなった。このとき英国はピール（Peel）内閣のアバディーン（George H.G. Aberdeen）外相の決断で、「米加国境は英国にとっては辺境の一植民地にすぎないが、米国にとっては死活の大問題」として国境を北緯四九度線とすることを提案、米側もこれを受け入れて、ここに米加国境は画定した。それはロッキー山脈からジョージア海峡、そしてホアン・ドフカ海峡を通って太平洋にいたる線となった。

ここに米合衆国は大西洋から起こり、太平洋にいたる両洋大国としてあらわれるにいたった。太平洋への進出がめざした方向はさきにふれた如くとなる。

⑨アメリカの内乱（南北戦争）

アメリカは強大な民主主義的人権国家の大洋国家としてあらわれ、その発展はまさに筆者のあげた発展の條件を明確に身につけたものとなった。しかしここに米合衆国が乗り切らなければならない一大困難が起こる。それがアメリカ市民戦争となって米合衆国の根幹をゆさぶる。

米合衆国では北部自由州と南部奴隷州の存在という明白な法律二体系があり、これが何時か統合されなければならないという運命にあった。ミシシッピー河の支流オハイオ河が南北の分岐点となり、両者の併存がはかられ、また新準州や新州のくみ入れで種々の妥協が行われたが、両者の対立は段々ぬきさしならぬものとなってゆき、リンカーン(Abraham Lincoln) のいう「二つに分かれた家屋は立つことができない。この政府はいつまでも半分が奴隷で半分が自由である状態に絶え得ないと信じる…」という認識が全国一般となった。リンカーンは人権擁護の大宗であり、奴隷反対派であった。

情勢は緊迫したが、このとき一事件が起こり、南北破裂必至となった。即ち一黒人奴隷が自由州に移り住んだことにより自由人身分画定訴訟を起こしたのであったが、これに対する米連邦最高裁判所は次の如きはげしい判示を行った。「アメリカ独立宣言はニグロを含んでいない。不幸な黒人は、アメリカから排除され……奴隷は米市民とはなり得ず、奴隷は商品にすぎない。」(Dred Scott Affair) この奴隷容認の裁判所をみて北部、西部は、真剣に将来を考え、南部との対決を覚悟する。

そして大統領選挙となり、リンカーンが当選した（一八六〇・一一）。南部はこれにより将来をあきらめ、連邦離脱の挙に出て、南北は決裂した。

ここから四年に及ぶアメリカ内乱が勃発し、幾多の困難の後、北部が勝を収めて南部のアメリカ合衆国分離を食い

止めた。

リンカーンは奴隷解放宣言を行い、またゲッチスバーグで有名な「人民の人民による人民のための政治」(Government of the People by the People for the People) を獅子吼してあらん限りの努力を戦争解決にそそぎこんだ。このアメリカ空前の大乱によって双方の戦死一八〇万余（参加兵員、北部六百万、南部一五〇万）を数え、戦費は関税によって賄われ、それは四七％の高騰となった。南部は一〇億ドルの不換紙幣を発行し、これは後、償還されずに終わった。

リンカーンはこの終戦直後暗殺されるが、この大乱の終結によってアメリカは全国統一の大強国となり、本論にいう民主主義的人権主義と大洋国家の体現は近未来に洋々たる発展をめざすこととなった。

⑩米合衆国の世界的海洋発展

世界はいまやインターネット、パソコン等によって結びあわされ、それによる取引で日常生活、経済性活が遂行される。これを欠いたり、どこかの部分がぬけたりすることは許されない。この大きな結合が世界に平和をもたらすことは疑いない。ちょうど近代国家の統一が、関税の国内的統一をめざす関税連合の出現と鉄道網の出現整備によって推進されたように世界の平和的結合から統一がパソコン、インターネットの普及によって達成される。これを世界の各地域に精力的に広げてその欠落部分のないようにすることが重要となる。

そしてそれにつれてこれらの団体、また経済団体から新しい代議士をつくる。即ちこれらから候補者を出させ、国民全体がこれを総選挙によって選出するのである。

国家のなりたち、その権力の源泉は征服であるが、この場合その源泉となるものは、また選挙で選ばれる。その母

体は現在各地で散発的に行われている住民パワーを全国的に統一し、ここから代議士たる候補者をたててこれから総選挙でその代議士を選ぶのである。

そしてこれがインターネット代議士を機能的にチェックし、監視し、監督するのである。こうして二院が生まれる。この二本だての代議士制度によって国政は、経済生活を土台とし、その動向にあわした政治が可能となるのである。これに当然裁判所が司法機関として加わる。

この制度によって憲法をかえる必要はない。三権分立と総選挙でこれは運用されるからである。裁判所は三審制度でその都度の紛争を解決し、さきの管理・監督による紛争は直接最高裁判所に訴えることとする。

専門の政治家が政治に興味と情熱を失い、各種問題の解決にとりくむより、首相（閣僚）をつぎつぎかえることにのみ興味と情熱を示している（これだけでも多大の情熱と時間をかけねばならず、何かえらい政治をやっているように思える。）限りこれらはかえられねばならない。一つの内閣は四年の任期中（憲法条項）、首相を中心に各種問題の解決に国内的国際的にとりくまねばならない。功罪は四年の後にのみ云々される。途中の人気投票や世論調査はやめなければならない。この意味で首相を出している政党の総裁任期二年というのは明白な憲法違反である（疑いがつよい）。国民の選択は四年に一回、四年間は政官財民の協力でいまいった内外の政治、経済、社会問題にとりくまねばならない。

しかしこれは実行されそうもないし、また新しい世界が開けているのであるからこういった既成政治にかわるものとして右のシナリオを提出したものである。そしてこれが国家権力をしめるのには、これらのメンバーが（現今の）総選挙によって現今の議会に席を占めてゆくことである。このメンバーを選出した国民パワーを動員して総選挙を制してゆくことである。内外にその趣旨と実行を大いに精力的に説き続けることである。これは現今の国民パワーの結

果から決して不可能なことではない、といえる。これが新国会の政治機構と考えられる。これにつき、大方の御一考を願うや切。

私の最終講義もいよいよ最後の時間となりました。みなさん方、諸先生の御静聴を心からありがたく厚く御礼申し上げます。この日は私にとりまして申すまでもなく大きな記念となります。この時を迎えさせてくださいましたみなさまに衷心より感謝をささげつつ、私の最終講義をとじさせていただきます。

ありがとうございました。

参考文献

書名	著者	出版社	発行年
近世外交史	北島平一郎	三和書房	一九五九
近世外交史Ⅱ	北島平一郎	関西大学出版部	一九六一
近代外交史	北島平一郎	創元社	一九七五　第一版第一刷
			一九九二　第八刷
現代外交史	北島平一郎	創元社	一九七九　第一版第一刷
			一九九一　第二版第一刷
両大戦間欧州外交史の研究	北島平一郎	こー書房	一九八一
第二次世界大戦の史的背景	北島平一郎	二三書房	一九九四
第二次世界大戦の歴史的研究	北島平一郎著作集第一巻	大阪経済法科大学出版部	一九九七
ファッシズムの理論と実際	北島平一郎著作集第二巻	大阪経済法科大学出版部	一九九六
外交の近現代的展望	北島平一郎著作集第三巻	大阪経済法科大学出版部	一九九七

The Chinese, the Korean Resistant Struggles against Imperial Japan that led to its Collapse, by Heiichiro Kitajima

朝韓中の抗日と大日本帝国の瓦解　北島平一郎著作集第四巻　大阪経済法科大学出版部　印刷中

こ一書房　二〇〇一